

平成5年度 BELCA 賞 ベストリフォーム・ビルディング部門 表彰作品

南 座

所在地 京都市東山区
用途 劇場
竣工年度 1929年
改修年度 1991年
所有者 松竹(株)
設計者 杉山隆建築設計事務所
施工者 (株)大林組



〔審査評〕 昭和4年（1929年）に、由緒ある櫓を備えた桃山風破風造りの豪華な劇場として竣工した南座が、平成3年に京都の景観にとけこんだ外観はそのままに内部を全面改修し、最新設備の近代劇場として改築された。舞台と客席が近く、役者が舞台上に立つと、観客に包み込まれる感じを受ける南座が60年振りの大改修を行い、しかも観客が一見しただけでは、どこが変わったのか分からないほど以前の雰囲気を残し再生された。

改修は、外観・内部全般・設備・舞台機構と全面的に行われた。外観が新築当初の真新しい姿にもどされ、内部は新法規に則った、客の安全対策と設備の近代化による快適追求・機能強化がなされた。エントランスホールやロビーにある精巧な金物・照明器具などは、新調する以上に手間と費用をかけ再利用されている。復旧した灯具の電装品はすべて取り替え、ワット数を増やし、灯体の金物は錆を落とし、漆塗り金箔押しするなどし、元の位置にもどされている。

客席は、椅子席を総入れ替えし、1512席あった座席は1090席に減らし、2・3階の栈敷席も畳敷きから椅子席に変更された。また廊下からの音漏れがあった引き戸も防音扉となり、観劇の環境を改善している。空調設備は近代設備に全面的に交換されているが、南座の和風の雰囲気を壊さぬよう建築の中に組み込まれている。

舞台機構は現代演劇に対応する機構へ更新された。プロセニウムアーチは1m高くなり、グランド・ミュージカルが上演出来るようになった。スピーカーの台数は大幅に増強され、シーリングライトが組み込まれ、内設迫りは1台から9台に、花道のすっぽん（小型の迫り）も1台から2台に、廻り盆と合わせて電動でコントロール出来るよう改修された。

鴨川の対岸から見る南座は、京都になくしてはならない風物のひとつといえる。現代において和風の職人・材料・技術が不足するなかで、技術を結集し、京都の歴史的景観を保存したことは意義が深い。劇場のような特殊な建築物は、新築の場合でも建築と設備を一体化し収めることが難しいが、旧躯体と意匠を生かし、近代的劇場の再生に成功したことは、建築主の意欲と設計者・現場の職人のチームワークの結晶であり、高く評価出来る。